



# 長足王と長耳王



葉山ユタ

煌々と満月が輝く春の夜だった。

雲は無く、白い月の光が、雪の融けたアスファルトの道をまだらに輝かせている。

市街地に有るオレンジ色の街灯は、風景を何もかもオレンジ色に染め上げ無遠慮で品が無い。彼らは嫌いな街灯の下を避けて歩いている。

長足王（ながあしおう）と長耳王（ながみみおう）は、山側から港へと続く、濡れた黒い坂道を、びちゃりびちゃりと静かな足音を立てて歩いていた。彼らの姿は、巨大な黒い塊と白い塊に見えるが、月明かりに照らされた道に、その影は映らなかった。白い長耳王が黒い長足王に話しかける。

「長足よ。この辺りに気配を感じるが、どうであろうか？これは本物か？」

「おう、長耳、わしも確かに感じるぞ。この辺りぞ。遂に見つけた。この強さは深くて広い」

「急がねばなるまい」

「なに、まだ夜明けまでは間があるわ。しかし、急ごう。気配が消える前に」

わずかながら、歩む速度を上げて坂を下ると、海から潮の香りのする風が山に向かって吹き上がってゆくのを体を感じる。湿った静かな風だ。

「おお、感じるぞ。渦が有るぞ」

「強い渦じゃ。やっと見つけた。あやつなら...行こうぞ、長足」

二つの塊は、ゆるゆると港の遊歩道へ進んだ。この辺りの街灯は、オレンジ色ではなく、ガス灯を模した青みがかった白い灯りだった。時刻は夜の十一時を過ぎ、港の付近にひと気は無い。遊覧船の待合所や、観光客向けの土産屋は全てシャッターを下ろし、凧いだ海の表面に、キラキラと月の光が踊っている。

闇の中、彼らの向こうに小さな赤い火がポッと灯り、青みがかった白い煙がフワリと風に舞った。

「あれだ、あれだ」

「おお、間違いないわ。渦の真ん中におるのはヒトであろうか？」

「ヒトのようじゃ。お主、声を掛けてみよ」

「声か...声を出さねばならぬか」

「分からぬが、呼ばねばなるまい」

二つの塊は、海に向かって佇みタバコをくゆらしているものの正面に立った。

長耳王と呼ばれている、白いモヤモヤとした塊から、ぎこちない音が発せられた。

それは、チューニングの合っていないラジオのような、傷だらけのレコードに針が引っかかったような音だが、声であることは察せられた。

「お、おおお主、お主、お主は、我、我ら、我らが、わ、わ、判るか、か、か？」

月明かりを浴び、闇の中に佇む男が、タバコを啜えたまま頷いた。

「判るよ」

長足王と呼ばれた黒い塊が、安堵したのか、大きな溜息のような音を発した。まるで船の汽笛のようだった。

「おお、お、我、我ら、お、お、お主に、頼み、頼みがあるのだ、のだ」

声を掛けられた男は、一歩前に進み出て、その二体のモヤモヤした塊を見つめた。それらは次第に輪郭を明確にし、身長二メートルほどの異形のものとなった。

白いものはのっぺりした丸い面で、耳たぶが異常に長く肩に付くほど垂れ下がり、その目は血が滲んだように赤く、ギョロリと飛び出している。古い色褪せた女物の花柄の着物を赤い紐で無造作に締め、青白い足は裸足だ。時折、小刻みに震えて神経質そうだ。

もう一方の黒いものは、顔が短く鼻梁が高い。黒々とした蓬髪で顔も目も黒光りし、見るからに猛々しい風体だ。紺地に細い縦縞の入った、やはり古そうな男物の着物を、太い革紐でグルグルと巻いて止めている。そして、その足は異様に大きく毛むくじゃらだった。

彼らの正面に立っている人間は、一見サラリーマン風の若い男だった。黒っぽいスーツに、黒っぽいコートを羽織り、タバコを啜えて腕を組んでいる。ただ、彼は異形のもの達を目の当たりにしても、顔色ひとつ変えず、いや、返って楽しげに彼らを観察していた。

「俺に頼みって、お前さん達、何者だ？」

タバコを左手に持ち替え、尋ねる両の目が笑っている。

白いものが、ギクシャクと答えた。

「わ、我が、我が名は、ながみみおう」

黒いものが、唸るように答えた。

「わー、我が名ー、は～、なが、あし、おおう」

男が右手でそれぞれを指しながら復唱する。

「長耳王に長足王だな。俺は白（ツクモ）と言う。何ならツクモ王でもいいぜ。ああ、話したいなら声を使わなくても結構だ。お前さん達のやり方で話してくれ」

長耳王と長足王は、顔を見合わせて鼻面に深いシワを作り歯をむいた。その表情は醜悪で恐ろしかったが、どうやら笑っているらしい。

「それで、長耳王と長足王は誰かの使いか？頼みってのは、お前さん達のご主人様の頼みなのかな？」

彼らは音声を使わずに、話しかけてきた。

「使いで来たのではない。だが、我らが主人の為の頼みではある」

「我らの話が判り、力のある者を長い事探して参った。お主の助けを乞うておる。この通りじゃ」

そうして、まるで無理矢理に体を屈めて頭を下げた。これは彼らにとって随分無理な体勢らしく辛そうだった。

「ほう…。俺に出来る事なら手を貸してもいいが、それで？お前さん達のご主人様はどこにいる？」

長耳王が港とは逆方向にある山を、干からびた様な細い指で指し示した。こんもりとした小さな山で、幾つかの坂に沿って立ち並ぶ家々の屋根が、白々と月の光を反射している。そこには明治大正昭和と、和洋折衷の趣ある旧家が立ち並ぶ、所謂「山の手」と呼ばれる住宅地が在り、休日ともなればカメラ片手の観光客で一杯になる人気の観光スポットでもあった。

「案内致す。ご同行お頼み申す」

長足王が体を半分ひねって、そちらの方向に白を促した。

「おい、今からか？もう時間も遅いぞ、夜が明けてからにしないか？」

「構わぬ。我らが自らの意志で動けるのは、この満月の宵のみぞ。さあさあ、行こうぞ」

焦れて、既に歩き出している長耳王に促され、仕方無く、白は遊歩道に設置されている吸殻入れに吸いかけのタバコを放りこんで歩き出した。

やれやれ、一服してから家に帰ろうと思ったのがまずかった。この連中は式神の様だが、自分達の意志でご主人様の為に働こうとは感心なものよ。ただの紙切れではなさそうだが、かと言ってお礼に金を払ってはくれないだろうな。

胸の内で愚痴りながらも、白零一はボランティアをする覚悟を決め、コートのボタンを止めて彼らについて行った。港のエリアから出て、だだっ広い、市電の線路が走る車道をゆっくり横切る。市営交通の最終が出た後の街は、シンと静まり返り車も人も見当たらない。満月の夜に、人と人でないものが、ゆっくり連れ立って歩いても、誰にも見られず何の差し障りも無かった。もっとも、人でないものが視える人間は、そんなにはいないのだが。

山の麓の、煉瓦を敷き詰めて整備された、観光用の広い坂道をしばらく歩いた所で、彼らは細い横道に逸れた。車一台が、やっと通れるような私道を一列になって歩くと、左右から松の木や樅の木が鬱蒼と頭上に枝を伸ばしていて、月の光が遮られ暗かった。古い電柱にくくりつけられた青白い街灯が無かったら、真の闇になっていただろう。

観光客に人気があるとは言え、この辺りは坂の勾配がキツイし、観光地として再開発された為、近所に食料品を買える店なども無いので、高齢の住民が暮らすには不便極まりなく、引越しをして無人になっている家も多いのだ。



だが、観光スポットと言う立地の有利さもあり、持ち主は家や土地を売り渡す。かと言って、その子供や孫達は、生活し辛い環境の上に古くて修理の必要な家には住みたがらない為、結局無人のまま年月が経ち、庭も家も荒れ放題、という余計面倒な結果を引き起こしている。

彼らが暗い一本道を歩いていると、向こうから突然車のヘッドライトが眩しく輝き、白の姿を照らした。

すぐ近くの家の門から右折して出てきた様で、白は道の片側の植え込みに背中を押し付けるようにして車を避けた。運転していたのは六十代くらいの恰幅の良い男性で、通行人に気配りする親切心など微塵もないような荒っぽい運転だった。勿論、運転手には長耳王達の姿は視えておらず、彼らの体を突き抜けて車は走り去ったのだ。

長耳王が遠ざかる車を血走った目で睨みつけ、文字通り地団駄を踏んでいきり立った。

「おお！糞忌々しい。あの者、何と憎い事か！」

「むっ、小賢しい奴め！腹黒い奴め！」

白が体勢を立て直して、車が出てきた家に目を凝らした。

「あれがお前さん達の家かい？」

その家は、この地方には珍しく黒い瓦を葺いた、瀟洒な平屋の和洋折衷建築で、木の塀で囲まれ、小作りで古くはあったが全体に立派な造りだった。

長耳王が白に向き直り、畏まって言った。

「白殿、我らはこの家に長く居り、家と主人を護って参った。だが、今は家に入る事すら出来ず、主人を助ける事もままならぬ。辛うじて庭先より見守るのみよ」

「で、俺に何をしろと？」

長足王が、猛々しい顔を歪めて牙を剥く。

「かつての様に、我らが家に入れて坊と家を護れば、それで良いのだ。後の始末は我々でしようぞ」

「まじないを解いてくれ」

「まじないを解いてくれ」

それだけ言うと、二体の異形のものは、さっき車が出てきた家の門へと進み、ずっと中に入ったと同時に消えてしまった。

「なるほどね」

白が開けっ放しの門を通過して敷地内に入ると、玄関に向かって白い石が敷き詰められており、玄関の引き戸の前には、縄で十字に縛られた拳大の石がコロンと一つ置かれていた。

玄関には明かりが点いておらず真っ暗だったが、左側の庭に面している縁側の方から明かりが漏れていて、地面に一筋黄色い光の線を描いている。

庭に目を向けると、敷地は広いものの全く手入れがされていないようで、庭木が鬱蒼と茂り、その奥の竹やぶと繋がって、庭と山自体の雑木林との境目が分からないほどだった。

白は玄関ではなく、荒れ果てた庭の方へ進み、月明かりを頼りにグルリと庭を眺めた。

大きな庭石が二つ置かれ、葉の落ちた巨木が二本、夜空に大きく枝を広げている。松やツツジ、楓、桜と植木は豊富だ。雑然とはしているが、季節ごとに趣きのある風景が楽しめる事だろう。

塀の側の乾いた地面から、クロッカスの花が幾つか顔を出しているところを見ると、かつては庭に球根を植え、花が咲くのを楽しみにしていた人達がいた事を想像できる。

奥の竹林の方へ行くと、木々に埋もれるように小さな木の祠があった。こちらも長い事放置されているようで、御幣も注連縄も無く、枯れ葉があちこちに溜り、蜘蛛が巣をかけている有様だった。枯葉を踏みしめて歩いていると、縁側のガラス戸が突然ガラリと開いた。

そこに立っていたのは、ジーンズにグレーのパーカーを来た二十代中ばほどの痩せた青年で、ぼんやりした目で庭を見ている。暗がりには立っている白の姿を見つけると、小さく、わっと声を上げ、驚いた拍子に足元がふらついた。

「だ、誰だ?! ひ、人んちの庭で、何してるんだ?!」

大声を出したが、怖さもあったのか声が上ずっている。白は彼を驚かせないように、ゆっくり歩み寄り、静かな声で話しかけた。

「夜遅くに申し訳有りません。私は、ある方達に頼まれて、あなたのご様子を伺いに参りました。先程までお客様がいらっしゃったようなので、時間を潰しておりました。私はツクモ、白と書いてツクモと読みますが、白零一と申します。」そうして、丁寧に頭を下げた。

青年は狐につままれたように一瞬キョトンとしていたが、相手がキチンとした身なりの若い優男だと分かると少し安心し、警戒した顔で、つっけんどんに言った。

「何だか良く分からないけど、もう遅いから日を改めて貰えませんか? 今、ちょっと調子が悪いんです」

実際、彼の顔色は夜目にも悪く、青ざめてくすんで見えた。白から目を逸らし、慌ただしく建てつけの悪いガラス戸を閉めようとして、彼は足を滑らせ庭に落ちそうになった。白が両手を伸ばして彼を支えたが、そのまま崩折れる様に縁側に座り込んでしまった。

「...具合が悪くて...」

搾り出すように呟いた彼の息から、ウィスキーの香りがプンと匂った。

「飲み過ぎましたか?」

「はは...弱いのにね...ちょっと風に当たろうと思ったんだけど...」

白は素早く靴を脱ぐと縁側に上がり、彼の体を支えて立たせ、障子が開けっ放しになっていた居間に連れて行った。

八畳ほどの居間には、大きな黒塗りの座卓が有り、ウィスキーの瓶や水差し、アイスペール、グラスや食べかけの寿司などが置きっぱなしになっている。畳の上には、巻いた掛け軸や桐箱などが幾つか並べられていた。白が青年を座布団の上に座らせると、彼はそのまま座卓に突っ伏してしまった。

「...眠い...俺、もう寝たいんだけど...」

「今、横になると吐きますよ」

「へへっ、そうなの？吐くのは嫌だなあ、喉が痛くなる...」

白は空いているグラスに水を注ぎ、彼の手握らせた。

「お客様は車で飲めないのに、あなただけ飲まれたんですか？」

「ふふ、叔父さんはいつもそうなんだよ...。酒は訓練次第だっつってさあ」

トロンとした目をして、グラスの水を一口飲んだ。

「あんた、誰だっけ？」

「白です。ツクモレイイチ」

「ツクモさん...。何の用？俺と面識無いよね？」

白はそれには答えず、床の間に掛けてある掛け軸を見つめて言った。

「珍しいですね、蛇の掛け軸なんて」

それは水墨画の掛け軸で、松の木の葉陰からダラリと体を垂らしている一匹の蛇が描かれていた。二股に別れた舌が、閉じた口からチロリと伸びている。墨の濃淡だけで、細かい鱗も描き分けられ、絵としてはそう悪くは無い。青年は自分の後ろを振り向き、その掛け軸を眺めた。

「ああ、叔父さんが前に持ってきて掛けてった奴だ。いいんだか悪いんだか俺には分かんないけど、蛇は財運を上げるんだって。俺が働かないで財産を食い潰しているから心配してんじゃない？」

白は黙って立ち上がると、床の間の掛け軸をそっと手に取り裏返して見た。

「この掛け軸自体は良い物ですが、悪い事は言わない、これはこのまま叔父様にお返しなさい」

「何で？メンドクサイ。俺、あの人には会いたくないんだよ」

「宅配便で送ればいい。どうやらこの家には、叔父様に送り返した方が良い物が、幾つか有るようです」

「何言ってんのアンタ。勝手に入って来て、訳分かんねえわ。一体、何の用なんだよ？聞いてやるから早く言えよ！」

彼は座卓に頬杖を付いて、小馬鹿にしたように笑いながら言った。

白もニヤリと笑うとコートを脱ぎ、座布団を引き寄せて座った。

「いつも朝方に寝て昼過ぎに起きてるんだろう？たまに人と夜通し話したところで、別に不都合はないじゃないか。明日の予定も特に無いだろう？」

そして座卓の上に置いてある、焼き物の灰皿を手を取った。



「タバコ吸ってもいいかい？」

先程より、態度が大きくぞんざいになっている。

「フン。俺は酒もタバコもやらないのに、客は好き放題しやがる。言っとくが俺は、至極真面目で健全な自宅警備員なんだからな」

「酔ってるね」

白は構わず、タバコを一本啜え、ライターで火を付けた。

「まあ、これはちょっとした魔除けでもあるのさ。ああ、君に飲酒や喫煙は薦めないよ。体に良くない」

「良く言うわ」

白がタバコの青みがかかった白い煙を吐き出し、何か考えているように黙り込んだ。青年は、そんな白の姿をボンヤリと不思議そうに眺めていた。

キチンとしたスーツを着て身だしなみも上品だが、この男どうも勤め人には見えない。冷めた目と小ぎれいな顔が癪に障る。そう言えば、さっき頼まれて俺の様子を見に来たって言ったが、一体誰の頼みなんだ？去年、親父が死んで、もう俺の身内は叔父一家しかいないし、自慢じゃないがリアルな友達なんて一人もいないぞ。

不意に白が口を開いた。

「玄関の前に石を置いたのも叔父さんなんだね？」

「え？石？ああ、なんか荒縄巻いた石の事？そう言えばそうだな。アレも魔除けの縁起担ぎだよ。あの人、そういうの好きなんだ」

「あれは、そういう意味で使うものではないんだよ。ただ、ここから先は関係者以外立ち入りご遠慮下さい、見ないで下さいって意味で置く物だ。茶室の周囲や庭に置く事が多いのだが、関守石と言う」

「へえ、そうなんだ。じゃあ、俺の家に入るのご遠慮下さいって意味になるのか？訪問セールスお断りって事？」

「そうとも取れるが、あの石はどうも変だな。招かれざる客だけではなく、色んな物を拒んでいる。処分した方がいいよ」

青年はポカンとして、人形のように端正な顔をした白を見つめた。何だか嫌な感じがしてきた。

「やだよ、俺。怖い嫌いなんだよ。さっきの掛け軸の事とか、こんな夜更けに気味悪い事言わないでくれよ」

「いや、掛け軸も大したものではないのさ。君は気がついていないようだが、裏側に変なお札が貼ってあるだけだ。蛇の鱗も付いてたけど」

「何だよ、それ！メチャクチャ気味悪いじゃん。何で叔父さんがそんな事するんだよ！」

「決まってるだろう？まじないだよ。叔父上は君の財産が欲しいのさ。君のお父さんは資産家で、この家以外にも色々残してくれたんだろう？」

白が意味有りげに微笑む。

「それは、まゝ...そうだけ。でもさ、そりゃ、万が一俺に何か有ったら、叔父さんしか身内はいないけど...でも、そんな事したからって...まさか」

白は、青年の目をしっかり見据えて言った。

「そんな事で命まで取られるか、と思うだろう？でも、君、体調悪いじゃないか、ずっと。そして、一番良くないのは...」

白の切れ長な目が厳しくなって、まるで睨みつけるようだ。

「死にたい、って思っているだろう？」

青年は息を飲んで押し黙ってしまった。すっかり酔いは醒め、胃のあたりがきゅっと縮むのを感じた。

一度は社会に出たものの、人間関係で消耗する事に耐え切れずリタイアし、ここ何年か引き籠りだった彼は、昨年、唯一の家族だった父が病で急死してから後、読書や絵を描くといった趣味への興味も全く失ってしまった。通っていた油絵の教室をやめてしまうと、すっかり他人との付き合いが絶え、冷え冷えとした孤独感が彼の心身を侵し、気力体力ともに減退しつつあるのは事実だ。

毎日、何の為に起きるのか、何の為に食べるのかと漫然と考え、ネットとテレビだけを楽しみに生きている。週に一二度、やむを得ず買い物に出掛けるが、そうでなければ一日中パジャマ姿でゴロゴロして日に日を繋いでいるだけだ。終いには、何もしないのに腹が減り、食べれば排泄しなければならない事にさえ腹が立ったが、それでも意を決して、外に出て仕事を探そうという気にはならなかった。

試算してみたところ、相続税を払っても、節約すれば死ぬまで食べていけるだけの財産が有ったからだ。幸か不幸か、家族はいなくなったが、両親の遺産と死亡保険金のお陰で、何もせずに暮らしていける。だが、そんな何の目的も楽しみも無い暮らしに、生きがいなど、どこを探しても見当たらなかった。怠惰な生活が続いたせい最近睡眠のペースも崩れ、眠れない日が続き、気が狂いそうに感じる事も増えた。

何もかも、人付き合いが苦手が無能な自分のせいだ、立派だった父と違って、自分には何の価値も無い、生きていても絶望した日々が絶え間なく続くだけなら、いっそ自分で早めにケリをつけた方がいいんじゃないのか？そういう思いに囚われ、どうすれば楽に苦しまずに死ぬか、ここ数日、そんな情報をネットで調べていた事を知られているようで恐ろしくなり、思わず青年は白から目を逸らした。

「俺も一杯貰うよ」

白は黙りこくっている彼を尻目に、タバコをもみ消して立ち上がり、水屋筆筒から新しいグラスを取り出すと勝手に水割りを作り出した。まるで遊びに来た親しい友達か親戚みたいな態度だった。

「スコッチか。お父さんの趣味だね」

「俺がこんな生活してるのは、叔父さんのせいなのか？」

ぼんやりとした問いかけに、白はグラスの中身を揺らしながら、首を横に振った。

「まさか、そりゃ違うさ。君の人間嫌いは元々のものだし、俺は金の有る人間が、引き籠って好きな事をして暮らすのが悪いなんて思っていないよ。昔の大貴族や文人は皆んなそんなもんだし、そういう生活が楽しく幸せなら大いに結構な事じゃないか？」

「そうなのかな...」

俯いて、組んだ手の指を眺める。陽に当たることが無いから、皮膚が青白い。こんな吸血鬼みたいな不健康な人間が、楽しく幸せに暮らせるものだろうか、と考える。

「世間的に見れば、君は結構幸せな星の下に生まれているのに、その幸運を享受せず、不幸だ、死んでしまいたいって思っているなら問題が有るね。そして、そんな気分させる仕掛けが、この家には幾つか有るようだ」

「そんな物が？」

彼は居間の中を見廻した。

父の弟である、叔父のくれた掛け軸、玄関の関守石、後は何だろう？今日は春向きの掛け軸を貸してくれと言って、代わりに楽茶碗を置いていったが、あれもそうなんだろうか？

親父の書齋に掛けてある額も叔父さんの贈り物だし、下駄箱の上の鏡もそうだ。良く分からない本も何冊か貰った。考えてみれば、叔父さんがくれた物って沢山有る。でも、いくら欲深いとは言え、あの叔父さんが財産欲しさに、俺の死を望んでるなんて、とても信じられない...

考え込んでいる彼をそのままにして、白は説明を続けた。

「その仕掛けは、君を護ってくれていたものを家から追い出し、良からぬ気を吐き続けて君の心身を弱らせて行くんだ。君は叔父さんに従順過ぎるよ。嫌なことは嫌だと言わないとね」

「護ってくれてたものって、何の事だか分からないな。それに、アンタは知らないから...。あの人の押しの強さに対抗出来る人間なんて、ちょっといないよ」

そこで、彼はさっきから疑問に思った事を尋ねてみた。

「俺の様子を見てくれと頼まれたって言ってたよな？それ、誰？俺の知ってる人？」

白はスコッチの水割りを飲みながら頷いた。

「知ってるよ。人じゃないけど」

「ええ？人じゃないって、何それ？」

「長足王と長耳王さ」

そう言って、楽しそうに微笑んだ。

「な、長足王と長耳王！？」

驚いてその名前を繰り返すと、ミシリと大きな家鳴りがして、青年は恐怖に飛び上がった。

白が可笑しそうに、ははは、と笑う。

「思い出してくれて、嬉しいそうだ。」

「な、何で知ってる？その名前、俺と死んだ両親以外、誰も知らないはずだぞ！」

「うん、その庭はいい遊び場だったんだね。楽しそうだった」

白がグラスで庭の方を指し示す。

青年は声も出ないほど驚いた。楽しそうって、何だ？何を見たんだ！？

彼のあっけにとられた顔を前にしても、白は表情一つ変えずに話を続ける。

「俺はあの王様達に、叔父さんが仕掛けた結界を解いて、今まで通り自分達が、君とこの家を護れるようにしてくれて頼まれたんだよ」

「俺の事を護ってくれるって...？」

「君、式神って知ってるかい？」

「式神？何だっけ？陰陽師かなんかの術？」

「そうだ。まじないを書いて生き物の形を与え、使役するものだが、あの二体の王は凶らずも式神化したものらしい」

「凶らずも...？確かに、俺は陰陽師もおまじないも知らないし...？」

「色々な条件が重なったのだろう。祠に宿る古い神、両親の想い、君の願い、そして彼らに名前と物語を与えた事。君は気がついていなかったかもしれないが、いつも君を護ってくれていたはずだ」

「あいつらが...」

青年の目に涙が浮かんだ。

「ただ単なる式神ならともかく、あれらは誰かが使役の為に作ったわけではないので簡単には消えないのだ。もう式神とも言えない自律した存在だが、まっ悪さをするわけではないし、君、一生付き合う覚悟は有るか？」

「ああ、勿論だ。この家にずっと居てもらいたい」

彼は、珍しくキッパリ答えた。長足王と長耳王は、ここで生まれ育った彼の大事な家族なのだ。式神だろうと何だろうと、愛しく想いこそすれ怖くなどない。

その答えを聞くと、白はにっこり笑って立ち上がった。

「よろしい。俺はこれから長足王と長耳王の願い通り、この家に掛けられた、邪なまじないを全て解く事にする」

青年は慌てて居住まいを正して正座した。

「ああ、お、お願いします。あの、俺も何かした方が...？」

「そうだね、取りあえず、その蛇の掛け軸はずして、桐箱に収めてくれ。それと、朝になってからでいいから、庭の祠を掃除してあげなさい」

そう言うと、白はタバコを啜えたまま部屋を出て行った。残された彼はのろのろと立ち上がると、床の間の掛け軸を丁寧に取り外した。裏側を見ると、下の方に文字のような図形のような物が墨で書かれた、小さな紙が貼ってあった。そして、何かキラキラする半円型の薄っぺらい物も挟まっていた。

「ううう、何、これ、気持ち悪...」

畳に座ってそっと軸を巻きながら、何だか悪い夢でも見ているみたいだと思った。壁に掛けられている時計を見ると、既に深夜となり、とうに日付が変わっている。

奇妙な話ばかり聞かされたが、結局、あの男は何なんだ。どうして俺のことを頼まれたんだろう？

不安と疑問で頭は一杯だったが、一方で、彼は懐かしい長足王と長耳王の事を思い出していた。

白は玄関の灯りを点け、つっかけを履いて外に出て、例の関守石を手にとってみた。石にも、十字に縛っている麻縄にも嫌な感じが染み込んでいる。

「おい、お前さん、お役御免だ。さっさとご主人様のところへ帰るが良い」

そう言って、関守石にタバコの煙を吹きかけ、石に押し付けてタバコの火を揉み消した。死肉を焼くような生臭い匂いが周囲に漂った。

そして、白はポケットからアーミーナイフを取り出すと手早く縄を切り、石を門の外に放り出した。

麻縄を片手に玄関に戻って、鏡や下駄箱をざっと見たところ、他におかしな物は無かった。

「部屋の奥の方が...」

玄関を上がると、居間の逆側に洋室のドアがあった。入って灯りを点けると、そこは青年の亡父が使っていた書斎らしく、板張りの床に美しい絨毯が敷いて有り、大正モダンの粋な造りだった。

仕事熱心だった父親の書棚は大きく、経済や投資関係の本がぎっしり詰まっている。父親が亡くなってから、この部屋は使われていないようで、デスクにはうっすら埃が積もっていたが、その上にジャンル違いの本が数冊乗せられていた。割と新しい、宗教や能力開発に関する本で、埃こそ積もってはいないが、読まれた形跡も無い。

「これかな」

白がその中の一冊を手にとってパラパラと中をめくると、紙の葉が挟まっていたが、それに描かれていたのは、文字か記号のようなものを崩して、花の形にデザインした、一見美しいものであった。

「妖しいねえ...良く見れば、死、と書いてある」

その本を持って、次に青年の寝所らしき部屋に行ってみる。

襖を開けて灯りを点けると、布団は敷きっぱなし、部屋中に服やお菓子の空き袋が散乱していて足の踏み場も無い。いつから掃除をしていないのか見当も付かない、積もり積もった散らかり様だった。

何とも言えない脂っぽい男臭さに閉口し、白は渋い顔をしてカーテンと窓を開けた。春とは言え、冷たい夜風が吹き込んだが、その風は部屋に沈殿した若い男の暗い澱を掻き回してから外へ掃きだしてくれた。

「やれやれ、靴下が汚れそうぞ」

眉間にシワを寄せ、脱ぎ捨てられたままの形で放置されている服やゴミを蹴飛ばしながら、部屋の奥にある押入れの襖を開けてみると、寝具や服の上に、縦横六十センチほどの薄い紙箱が一つ置いてあった。布団の上に放り出して蓋を開けてみると、中に有ったのはF6号ぐらいの額つきの油絵で、アジア風の妖艶な半裸の美女を描いたものだ。美しいが、淫靡でどこか獣じみている。

「悪いが君は彼の好みじゃないらしいよ。ご主人様の所へお帰り」

そう言って白はナイフを取り出し、一息にキャンバスを切り裂いた。

途端に、どす黒い影のような物が切り口から吹き出し、白の体にぐるりと纏わり付くかと思えたが、もう一度キャンバスにナイフの刃を突き立てると、黒い影は勢いを失い、白の周りで霧のように薄くなり風に消えた。

「これで全部かな」

白が手に麻縄、本、油絵を持って居間に戻ったところ、青年は居間の座布団に座ったまま、滂沱の涙を流して悄然としていた。

青年の名前は、真山慎一と言った。

彼の父親は都市銀行の支店長を勤め上げた人物で、退職後もフリーで行っていた経営コンサルタントや株の売り買いにより、実直ながらしっかり財産を築いた人物だった。そして、この家は元々、造船業で身代を築いた慎一の母方の持ち物だった。結婚した時、母の両親が可愛い一人娘に譲ってくれ、この由緒正しい大正時代のお屋敷を改装して新居としたのだ。

両親は結婚後なかなか子供に恵まれず、父親が四十を過ぎてから出来た一人息子の慎一は、喘息気味で体が弱かった事もあり、それこそ目の中に入れても痛くないほど両親に溺愛された。

四十を目の前にして、体が弱かった母親は、息子に弟や妹が出来る可能性は少ないと思い、彼が五歳になる頃、何かペットでも飼ってあげようかと考えていた。子供思いの親の気持ちは相通じるのか、息子の五歳の誕生日、母親がプレゼントしたのは真っ白で目の赤い雄の子ウサギで、父親がプレゼントしたのは嘘か本当か、狼の血を引くと言われた、黒い雄のアイヌ犬の子供だった。

当初、ウサギと犬と一緒に飼うのは、ウサギにとって危険ではないかとみんな心配したが、二匹とも幼かったせいか争うような事はなく、それこそ一人と二匹は兄弟の様に仲良く、毎日じゃれ合って楽しそうに遊び暮らしていた。名前のごく一般的なもので、ウサギがミミで犬はジャックだった。

ある夏の日の午後、慎一が幼稚園から帰って来て縁側でゴロゴロしていると、空想好きな母親が、ミミとジャックは、本当はウサギの国の王様と犬の国の王様なんだよ、と面白おかしく語ってくれたのだ。

「王様なの？なんて名前なの？」

無邪気な息子の質問に、母親は楽しそうに答えた。

「ええとねえ、ミミの本当の名前は長耳王。ジャックの本当の名前は、えーと、長足王って言うの」

「ながみみおうに、ながあしおう...すごくエライ王様なんだよね？」

「偉いよお、それに強くて優しくて賢いの」

「うわ～、すげえ。ジャック、ミミ、こっちおいで。お前達、本当は王様なんだってさ」

ジャックはすぐに庭から飛んできて、ペロペロと慎一の手を舐めた。ミミは、縁側でダラリと横になり、耳だけ時折動かして、聞いてますよ、と合図していた。

「長耳王と長足王は、人間の子供の慎一君を、ずっと悪いヤツから護ってくれるのよ」

「悪いヤツって誰？いじめっこ？」

「あら、幼稚園にいるの？いじめっこ」

「ううん、いないけど...。長足王、強そう！長耳王は、きっと頭がいいんだよ」

「そう、そう。そしてね、二匹は満月の晩だけ、大きくて立派な王様の姿に戻れるのよ」

母親の語る二匹の冒険譚はとても愉快で、それから何度も、縁側や布団の中で、長耳王と長足王の活躍を話して聞かせてくれたのだった。賢くて気位の高い、真っ白いウサギの長耳王と、勇ましく情の深い、真っ黒な犬の長足王は、いつの間にか慎一のヒーローになっていった。

そして、実際に二匹はとても賢く、ジャックは優秀で勇敢な番犬だったし、ミミも時折足を踏み鳴らして、同居している人間達に、何らかの注意を促す事が有り、慎一が母親の語る物語を半分信じていたほど頼もしかったのだ。長足王と長耳王の物語は、家族三人だけの楽しい秘密のお伽話だったが、残念ながら動物の寿命は人より短い。

慎一が十二歳のある朝、長耳王ミミは突然その生涯を閉じていた。

ミミの亡骸は、母親の赤い着物の端切れに包まれ、赤い帯締めで結ばれて、庭の祠の脇に埋葬された。祠は、前の住人がお稲荷さまを祀る為に設けたもので、その当時は母親がキチンとお祀りしていたのだ。

墓の上に手書きの蘇東坡を立て、泣きながら手を合わせる慎一の涙を、長足王ジャックが遠慮がちに舐めて慰めてくれた事を、慎一は今でも良く憶えている

「そんなに泣くんじゃない慎一、長耳王ミミは、天国からお前のこと見守ってくれているよ」

その時、優しい母親も慎一の頭を撫でながら、長足王ジャックと共に側にいてくれた。

その後、母が病で亡くなった。

元々心臓が悪かったのだが、外出先で発作を起こして倒れ、救急車で運ばれた時には、もう手遅れだったそうだ。慎一は、まだ十四歳だった。勿論悲しく淋しかったが、同時に母親が、まだ歳若い自分を残して逝ってしまった事が恨めしくもあった。仕事で忙しかった父は、亡き妻を悼んだり傷心の息子とゆっくり話す時間が取れなかったが、長足王ジャックだけは常に慎一の隣に居て、彼を慰め護ってくれていて、その事を慎一は心から有り難く感じていた。

「長足王ジャックは長生きしてよ。僕が大人になっても生きていてよ」

ジャックの首に腕を廻して抱きつくと、ジャックは眼を閉じて、その顎を慎一の肩に乗せた。

ヒゲが頬に当たってくすぐったかった。

そして、慎一はまた泣いた。泣いてばかりだった。

だが、長足王ジャックも老いていった。

若い頃、猫を見つけては猛ダッシュし、他の犬を見かけては吠えまくっていた彼も段々と弱り、散歩に連れ出しても疲れてすぐ家に戻りたがるようになってきた。

慎一が十七歳の夏休み、とうとう自力で動けなくなった長足王ジャックは、父親と慎一に看取られて静かに息を引き取った。父親は自分の古い着物の端切れでジャックを包むと、愛用のリードと一緒に、長足王ミミの横に埋葬した。この時は、流石に父親も淋しかったのか、初めて二人でミミやジャック、そして母親の思い出をゆっくり語り合ったのだ。

「お前、長耳王と長足王の話、憶えてるか？」

「憶えてるよ。面白かったもん」

「うん、面白かったなあ。あれは、母さんが面白かったんだらうなあ」

「うん、母さんは、ちょっと変わったた」

「俺は、その変わったところが好きだったんだよなあ」

そうして、慎一はまた泣いた。父は黙って背中を撫でてくれたが、硬い毛に包まれた、頼もしいジャックが恋しかった。

その父もいなくなり、俺は本当に一人ぼっちになった...



「君、大丈夫かい？」

声を掛けられて、慎一はハッとした。涙で濡れた顔を上げると、畳に片膝を付いた白が心配そうな顔をしてこちらを見ている。

「君が、あんまり泣き虫なんで、長足王と長耳王が心配しているぞ」

慎一は、座卓に置いてあったオシボリで顔を拭いて、鼻水をすすった。

「あんなに可愛がっていたのに...何年も忘れていた。墓に線香も上げてないんだ。父さんと母さんの仏壇も放ったらかしで、俺は馬鹿で薄情なダメ人間だ」

「君は自己評価が低いねえ」

呆れたように呟くと、白はまたタバコに火を付け、ふっと青い煙を散らす。

「その絵とか本に、まじないが掛けられているのか？」

慎一は気を取り直し、畳に置いてある幾つかの品を見て尋ねた。

「うん、まじない自体はシンプルだが、張られた結界と、叔父さんの気迫はホンモノだ。それ、ひとまとめにして送りつけてやるといい。それがどういう意味か、本人には解るだろうからな。」

慎一は改めて、叔父の顔とお為ごかしの親切を思い出し、ゾツとした。

「それでも、まだ俺に変なちょっかいをかけて来たら、どうしたらいいんだろうか？」

ニヤリと白が不敵な笑みを浮かべる。

「その時は、長足王と長耳王に頼むんだな。あいつらは、君に命令されれば、より力を増す。ご主人様の為なら、鬼にでもなれるんだ。特に満月の夜は血の気が多くなるようだから、俄かまじない師の一人ぐらい、どうにでもしてくれるぜ」

慎一は白の言葉を聞いて怖くなった。

「いや、いや、そんな事頼まないよ。俺はただ静かに暮らせれば、それでいいんだ」

「なら君がしっかりすればいいさ。いずれにせよ、人を呪うなんて事はしないに限るがね。まあ、兎に角まじないは解けたんだ。この後どう生きるかは君次第だね」

そう言うと、コートの袖に腕を通して立ち上がった。

「終わったから帰るよ」

「ええ？帰るたって、もう夜中だよ？この辺りにはタクシーも来てくれないし、あの...部屋なら空いてるから泊まっていけば？」

「いいよ。他所の家だと眠れないんだ」

「あー...。そう、あ、あの、俺は何か、お礼をした方がいいんじゃないかと思うんだけど...」

「んー、君に頼まれたわけじゃないからなあ...。それじゃあ、そのスコッチをくれ。君、どうせ飲まないんだろ？」

「ああ、勿論。こんなので良ければ幾らでも...」

そう言うと、慎一は飲みかけのスコッチのボトルと、水屋筆筒から封を切っていないブランデーのボトルを一本取り出し、慌ただしくデパートの紙袋に入れて白に渡した。「あの、それとですね」

ちょっと言葉遣いが丁寧になる。

「また、何かあった時は相談に乗って頂きたいので、その、白さんのご連絡先を教えてくださいませんか？」

白はちょっと考えて、もう一度座卓の前に座ると、ポケットの中から手帖を出して、手早く連絡先を書き、そのメモを慎一に渡した。

「君は金持ちだからな、次があったら、しっかり請求させて貰うよ。言っとくが俺はプロなんだ」

「はい、お願いします。今日はありがとうございました」

慎一は、そのメモを押し頂いて頭を下げた。

「見送りは要らないよ」

そう言うと、白は紙袋を持って立ち上がり、縁側から庭に下りて出て行った。

門をくぐって、まだ月の明るい私道に出ると、道の両側に長足王と長耳王が立っていた。連れてこられた時より、穏やかな様子をしている。

「お前さん達も、見送りはしなくていいよ。あんまり坊やを甘やかさないようにな」

二体の異形の王は、畏まって頭を下げた。

白は紙袋を片手に、月の光を浴びながら、また坂道をのんびり下りて行った。

数ヵ月後の事、白の事務所に真山慎一から小包が一つ届いた。

中を開けてみると、手紙と一緒に、キレイに装丁された絵本が一冊出てきた。手紙によると、あの夜の後、一念発起して慎一が自費出版したもので、彼の母親が語った物語に慎一が絵を描いた、長足王と長耳王のカラフルな絵本だった。

「長足王と長耳王の大冒険」と飾り文字でタイトルが入った表紙には、真っ白なフワフワのロープをまとった美しい白ウサギの王と、黒光りする豪華な甲冑を身に付けた、勇ましい黒犬の王の姿が描かれていて、白は自分の知っている、長耳王と長足王の姿とのあまりのギャップに、一人事務所で苦笑いした。

物語は、とても楽しく心温まるものだったと言う。

この作品はブログ「[白嘘物語](#)」に連載していた小説を、加筆修正したものです。

お読み頂き、誠にありがとうございました。

尚、ブログは2011年12月に移動しました。

新しいブログはこちらになります「[白嘘物語-つくもうそ物語](#)」



[長足王と長耳王【白嘘物語より】](#)



2011年4月16日



著者: 葉山ユタ



白零一シリーズ

「夢違え」  
「犬と旅する男」

Copyright Y u t a H a y a m a All Rights Reserved